経営の〝こつ〟を尋ねる 第27回

400年続く 武家茶道「上田宗箇流」を 伝え続ける十六代家元

上田 宗冏（そうけい）氏
茶道上田宗箇流16代家元

1968年慶応大経済学部を卒業し、広島銀行に勤務。72年に上田宗箇流家元若宗匠を継承。95年に16代家元を継承。1945年6月20日生まれ、広島市出身。

永続する企業、伸び続ける企業の経営には職人的な勘所がある。連載でインタビュアー牛来千鶴が、経営の〝こつ〟を尋ねる。

気持ちが引き締まる武家の家の空間

旧山陽道に南面して立つ大きな正門を前にし、その威厳ある風格に一瞬たじろいだ。

われに返り、和風堂の玄関側へと回り数寄屋門をくぐる。玄関を上がり、案内の方に従って書院屋敷へと、細長い廊橋を進む。

静けさの中に何か、温かみを感じる心静まる空気。目に見えない何かに守られているような安らぎの空間に誘われ、タイムスリップしたような、そんな感覚さえ覚えた。

通されたのは、松涛之間。陶板敷で十五畳の立礼席（椅子に腰掛けてお茶を頂く席）である。庭に面した角部屋で、大きく開けた障子の窓から、爽やかな初夏の光が降り注ぐ。

ここ和風堂は、家祖である上田宗箇が広島城内に造営した上田家上屋敷を、古絵図を基に十六代家元の上田宗冏氏が30年の歳月を費やし再現したものだ。

この庭の灯籠も手水鉢も、当時のものを運び込んで置いており、それらが放つ歴史の重みは、深過ぎて言葉にならない。

薄茶を頂き、ほっとひと息。と同時に、きりりと気持ちを引き締め、程よい緊張感の中でインタビューを始めた。

キャリア女性や経済人 外国人にも支持される武家茶道

上田宗箇流の門下は、広島を本拠に中国地方、関西、関東、アメリカ、ドイツ、オーストラリアに在住している。他の流派と比べて男性が多く、関東の稽古場には、キャリアの女性も多いという。

上田宗箇流の魅力は、桃山時代の武将の創作茶の湯が貴く、躍動感にある。

作法の特徴的な例としては、まず、男性と女性では礼の仕方が異なる。茶道の点前にも異なる部分があり、男性は馬上の姿→柄杓（ひしゃく）で湯水をくむ動作に弓矢をつがえる動作が残る。

刀を差していた名残で、裾紗（すそさ）を右の腰に着けることなど、いかにも、武家茶道らしい。

また、点前が直線的で、外へ外へと向ける繰り返される動きなど、柄杓の構え方、扱い方、裾紗の扱い方が独特だ。

その姿は凛として美しく、潔い。

「武家茶道に触れたい」と、外国人やビジネスの第一線で活躍する、現代人が憧れる気持ちがよく分かる。

新年の訪れを祝う和風堂初釜には、知事や市長、国会議員、地元の経済人をはじめ約600人が訪れ、無病息災を願う一服を味わう。

大学や広島県人会など、さまざまな場でも茶会が開かれ、上田宗箇流のお茶は、多方面から支持されている。

400年 桃山の茶が現代に続く理由

家祖の上田宗箇は、豊臣秀吉の側近くに仕えた大名で、千利休、古田織部に師事。元和5年（1619年）、浅野長晟に従って広島に入り、西部一万七千石を知行する芸州藩（広島藩）家老となった。

浅野家の家老として茶家らを召し抱え、当時、家中には1000人もの人が居たという。

「地方にも、大大名がいて、それぞれの文化を持っていた」

と、宗冏氏。

時代は変わり、侍は消えたが、江戸期のシステムを昭和30年（1955年）まで続けた上田宗箇流は、日本を代表する武家茶道の1つとして、現代に継承されている。

「昔のものに守られていた」

江戸期以来の資産のおかげで、昭和20年代（1940年代半ば～50年代半ば）までは、続けることができたのだという。

しかし、原爆で広島は壊滅した。上田家はもともと城内にあったが、昭和初期に大手町を経て、現在地の西区古江に引っ越していたため、戦火は免れた。上田家に伝来する道具や古文書など重要な文化財は守られたものの、

「戦後は経済復興が優先で、文化を語れる時代ではなかった」

宗冏氏は、上田家の外孫で、前家

元のおいに当たる。父親と祖父母を被爆で失い、下町の小さな家で母親に育てられた。母は心臓を患っていたが、実家に頼らず苦労して育ててくれた。

「当然、助けなくてはと思っていた」

しかし苦労したという感覚はない。みんな大変なのだということを空気で感じた世代。育ててもらって感謝、その思いに尽きる。

むろん、家には茶室などなかったが、食・寝共にする部屋で、母がお茶を教えてくれた。

「幼い頃から、お茶は好きだった」

その経験から、

「お茶は、どこでもできる」

と、言い切る宗冏氏。

「海外でも、狭い場所でも、どこであろうと、その空間を仕切るのが役目」

そう語るまなざしには、静かでありながら、大きな使命に導かれた、底知れぬ強さを感じた。

江戸時代300年にわたり上田家に伝わった武家文化、宗箇の茶が現代に続く理由。そこには、代々家元の信念と叡智（えいち）があってこそと、感じ入る。

銀行員から後継者に 50歳で家元を継承

「幼少の頃は、悪ガキだった」

と、意外な言葉。悪戯はしょっちゅう。品格漂う現在の宗冏氏からは想像もつかないが、母は、

「この子がこのまま下町の子になったらどうしよう」

と心配したという。父がいなかったので、5歳年上の兄が、半分は父親のような存在。上京した大学4年間も一緒に下宿し、よく世話になった。

卒業後は、広島に戻り広島銀行に就職した。1970年のころである。銀行からの融資は企業の成長を促進させ、地元に感謝された時代。

同時に、伝統や文化の大切さが言われ始めた頃でもあった。

「広島には何もなくなった、と言うが、文化はあるじゃないか」

地域貢献となる銀行の仕事は、やりがいがあり楽しかった。辞めるには勇気が要ったが、

「地元に伝統文化は要る」

という周囲の励ましにより、決断した。31歳の時だった。

家元を継いだのは50歳の時。文化を継承しようと思うと、多くは趣味の会になりがちだが、国内外に門下を抱え、経済界ともつなげ5000人もの愛好者に支持される上田宗箇流の今を築いた要因に、宗冏氏のバランスの取れた資質は欠かせなかったと思われる。

1975年、30年の歳月を費やして、広島城内上田家上屋敷「和風堂」を再現した功績を見ても、宗冏氏のプロデュース能力は素晴らしい。

文化人としての資質に加え、世の中の動きを読み行動する力、その両方を備えてこそ出せる結果ではないか。そう私は思う。

家霊が共にあるか 最後の決断は、始祖との対話から

現在、70歳の宗冏氏。これまでで一番うれしかったことは？との問いに、

「種々問題が起こっても1日1日心が収まることが少しずつ多くなっていることに気付き、今はそれが自分にとってうれしい」

一喜一憂せず、右往左往しない心のゆとり。年を重ね、経験を重ねるほかに、若輩にもそんな境地に達する秘訣はあるのか。

花は人の心を清め、笑顔にしてくれる力がある。

「朝、茶室を掃除し、いい花を見つけると、花に向かって笑っている」

と言う宗冏氏は、毎朝、家祖である宗箇が造った手水鉢や灯籠をお参りするという。

「家霊が共にあるか」

家霊すなわち宗箇と対話する中で、始祖の思いを諮り、最後の決断をするのだと。

経営に決断はつきものである。悩みは尽きない。しかし答えは、もしかすると先祖とつながる自分の中にあるのではないか。忘れかけていた大切なことを思い出させていただいた。

〈インタビュー・記事〉牛来（ごらい） 千鶴（ちづる）
ソアラサービス社長。広島最大のシェアオフィス「ソアラビジネスポート」を運営。「広島に〝あったらいいな〟をカタチに」を理念に掲げ、地場企業とのコラボ商品の開発や創業支援など、地域を元気にするプロジェクトを推進している。
【主な公職】広島県総合計画審議会委員、広島市産業振興センター理事、中小企業基盤整備機構 経営支援アドバイザーほか。